

# 卒業制作・論文作品集 7

畿央大学健康科学部  
人間環境デザイン学科

The 7th Graduation Works.  
Kio university  
department of Human Environmental Design.

## ご挨拶

畿央大学学長  
冬木 智子

美しいものに憧れる、これは幼少の頃より抱きつづけた自分の宝の様なものでした。そのためには先ず、何に感動するかであります。それは描かれた線であり、色・音・香・觸など即ち5感であります。この感性は天性の遺伝的要素にも左右されると思われます。しかし優れた才能に恵まれた人間であっても、それを磨きあげる機会があって始めて、輝かしい美を創造することが出来るのではないのでしょうか。

本学の人間環境デザイン学科に入学を果たした学生の皆さんは、その得難い素材を自らの努力と探究心の発輝により、優れた成果に結びつけて頂きたいと願っております。例えばこの度発表された床しい茶室の構造においても豊かな教養と、思いやりの心と、建築学に基づいた構造がよく表現されていることに感銘をうけた次第であります。

人生はあくことなく、美に憧れ、創造し、継続することではないかと考えております。

畿央大学創立10周年の歩みの背景には、はるか66年前に、ささやかにまかれた冬木学園の種が永年にわたり、建学の精神を礎に絶ゆることなく育くみつづけられた成果ではないかと感慨一入であります。

まさに「継続は力也」を心深く秘めて全学あげて歩みつづけたく決意を新たにしている次第であります。

<b>ご挨拶</b>		<b>003</b>
<b>■作品</b>		<b>007</b>
<b>学長賞</b> 中井 千織	繋 ～私と利休～	008
<b>優秀賞</b> 竹本 笑子	離れたくない～近隣センターから高齢者福祉施設の街へ～	012
仲川 拓馬 野神 千鈴	蚕からの贈りものー経糸と緯糸の軌跡ー	014
村井 智絵	ダリテーブル(テーブルとして使用できるデルフトのフェルメールの亡霊)	016
守行 一晃 山本 早輝	故キョ温ネテ新シキョ知ル～M邸改築工事～	018
池角 有紀	星空館	020
井上 瞳	BRILLIANT GIRL～あこがれ～	021
井上 紗矢香	森の幼稚園	022
植田 理恵	縄文時代に想いを馳せる～風を感じて～	023
浦本 諄也	ささしま立体スポーツ公園	024
大橋 亮太	モ・ダン～モザイクアート×だんじり～	025
岡田 千枝	ほっとひといき。～ひつじたちのおもてなし～	026
黒松 美保	前向きになれる病室のインテリア～奈良県立医科大学附属病院～	027
阪口 佐知子	Four Seasons House～nLDKから(LDK) <sup>n</sup> の都市住宅～	028
佐藤 唯	光を編む～ハットランプ～	029
佐藤 信也	水辺のアート～Candle Box～	030
澤井 宏実	Cute Cotton Costume 綿づくり・糸づくり・布づくり	031
四方 祭生	3C chair	032
相馬 克志	リーフアリーナ～2064年 大阪オリンピックへ～	033
高橋 恵理香	break time square	034
武智 千佳	Kioセミナービレッジー不思議の森公園に建つ畿央大学保養所ー	035
武村 安里紗	帽子相愛～hat・heart・hermoney～	036
多湖 初菜	Green Hotel	037
田中 康介	吉野郡阿知賀全寮制小学校	038
玉山 真梨子	Houses for Every Life Stage～個室賃貸型分譲住宅の提案～	039
辻井 景子	Cloth jewelry	040
辻川 貴子	イス・すき・いす・スキ	041
濱田 万弥	憧れ～フリージア。大人への階段～	042
平井 菜美子	椅子の修復と再生～私のリフォーム～	043
矢部 豊	おとん	044

## ■論文 045

坂口 友祐	関西における設計者と居住者を対象とした24時間機械換気システムに関する意識調査	046
助川 渚 福本 悠美	新しいタイプの高齢者住宅～サービス付き高齢者向け住宅に関する事例調査～	048
田中 純樹 藤戸 禎寿	ボウリングの熟達における自己調整学習の事例研究	050
中辻 淳 水脇 卓也	大学生の自室の家具配置に関する研究～生活行為に着目した家具レイアウトパターンの考察～	052
橋本 淳矢	夏期における高齢者の温熱環境と生理量の実態調査	054
平井 瞭世	奈良の伝統的な防寒具「おいね」着用が温冷感に与える影響に関する研究	056
松井 貴史	町家に住むということ～温湿度環境調査と町家の住み心地との繋がり～	058
妙本 咲季	震災仮設住宅における住民コミュニティ形成のための建築的提案～石巻でのボランティア経験を生かして～	060
南 貴寛	高齢者の居場所、役割創出としての活動～NICE! 藤井寺親父パーティの取り組みから～	062

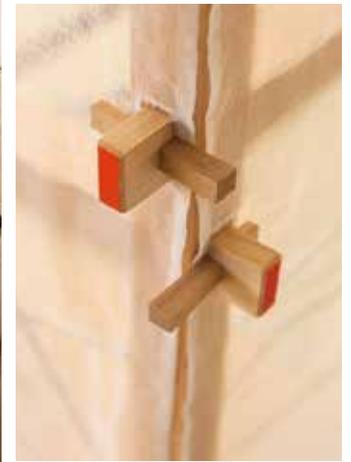
## 制作・研究風景 064

## 講評会風景 066

## 大卒業展・シンポジウム 070

## 講評 074

作品  
works



中井 千織  
Chiori Nakai

三井田ゼミ

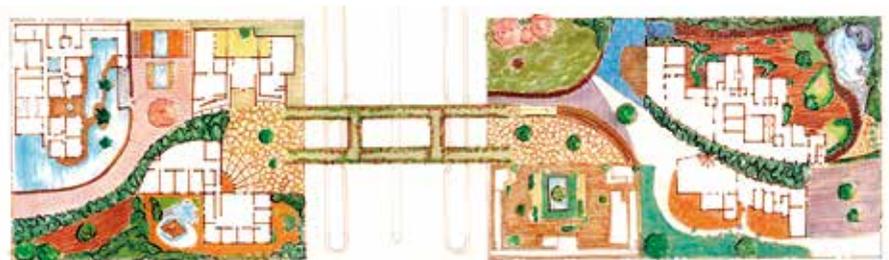
### 繫～私と利休～

室内で使用する一畳台目の組立式茶室。  
組立時、ネジや釘は一切使用しないため、繰り返し組立・分解が可能。  
木材と鉄棒だけで組み上げる直線的なデザインの立方体を蚊帳で包み、不思議な非日常空間の茶室を生み出す。

### 受賞のことば

この作品は、私一人では決して完成させる事はできませんでした。制作に協力して下さった塚本建具店さん、三井田先生には感謝の気持ちでいっぱいです。作品を通して多くの方に出会い、助けられ、自分自身も成長することができたと思います。慣れない作業で苦労したこともありましたが、忘れられない貴重な経験となりました。ありがとうございました。





竹本 笑子  
Emiko Takemoto

藤井ゼミ

### 離れたくない ～近隣センターから高齢者福祉施設の街へ～

計画地は桃山台から竹見台に跨る近隣センターである。千里ニュータウンは街開きから50年が過ぎ高齢化が進行しているが、高齢者福祉施設の供給がその人口構造変化に追いついていない。人生の過半をこの街で過ごした古くからの住民にとってこの街は故郷であり、この街で作ったコミュニティを守り、この街で出会った友人達とずっと過ごしたいとの思いがある。介護が必要になったので郊外の福祉施設へ、また、病を得たので他地域の病院へなど地域外へ離れることなく、生涯をこの街で過ごせるための複合型高齢者福祉施設を計画した。



仲川 拓馬  
Takuma Nakagawa

野神 千鈴  
Chisuzu Nogami  
村田ゼミ

### 蚕からの贈りもの — 経糸と緯糸の軌跡 —

今回、本格的な機織機を使用し、蚕6000頭からの糸作り、染め、織りの工程を経て、男性用、女性用着物の作品が出来上がりました。両作品共に、絹の使用にこだわり、男性の力強さ、女性のしなやかさを演出することに成功した作品となっております。



村井 智絵  
Tomoe Murai

加藤ゼミ

### ダリテーブル (テーブルとして使用できるデルフトの フェルメールの亡霊)

画家ダリの「テーブルとして使用できるフェルメールの亡霊」に描かれている擬人化された家具を現実を作り出してみた。  
尊敬してやまない画家フェルメールを思うダリ、年若い杖をつき、もう立ち上がることのできないフェルメールをしのんで。

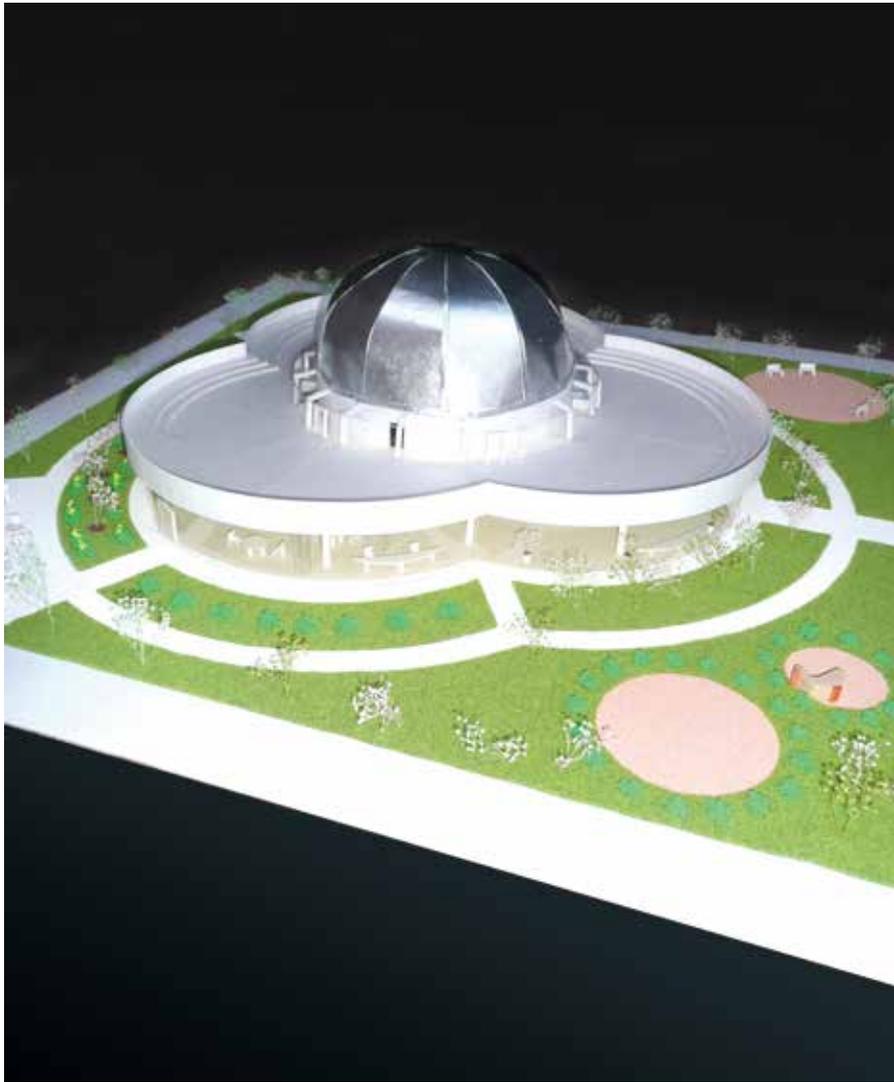


守行 一晃  
Kazuaki Moriyuki

山本 早輝  
Saki Yamamoto  
三井田ゼミ

### 故キヲ温ネテ新シキヲ知ル ～M邸改築工事～

築100年という長い歴史を受け継ぐこの由緒ある旧家。そこに満ち溢れる力強い存在感と生命力。昔の趣を残しつつも、現代の暮らしに適応した新しい住まいへ。過去と現代の共存で、また次の100年へと時を刻みはじめる。



池角 有紀  
Yuki Ikesumi

中山ゼミ

### 星空館

明るい時はプラネタリウムで、暗くなったら屋上から直接夜空を楽しむ。

24時間いつでも満点の星空を眺めることのできる施設を計画しました。



井上 瞳  
Hitomi Inoue

村田ゼミ

### BRILLIANT GIRL ～あこがれ～

女性をイメージしたdress。可愛らしさ、大人っぽさ、優しさ、繊細さ…そのすべてをこのdressで表現。2012KDKファッショングランプリコンテストへの出展ずっとやりたかったdress制作、あこがれを現実に…！



井上 紗矢香  
Sayaka Inoue

加藤ゼミ

### 森の幼稚園

たたたたつ とととつ  
 子どもたちの あしおとが ひびきます。  
 ここは いっぱいの木に かこまれた 森の幼稚園。  
 ははははつ  
 子どもたちの わらいごえが きこえてきます。



植田 理恵  
Rie Ueta

村田ゼミ

### 縄文時代に想いを馳せる ～風を感じて～

縄文時代から受け継がれてきた糸作り・色彩・道具。それらを使い古い民家に合う屏風を制作。屏風から流れる四季折々の風を感じながら縄文時代へと想いを膨らませます。



浦本 諄也  
Junya Uramoto

藤井ゼミ

### ささしま立体スポーツ公園

誰もが自由に使えるスポーツ公園を名古屋の中心市街地に造る。ここに来ればテニスも、バスケットボールも、バレーボールも、ランニングも、ボーっとすることも、食事を楽しむことも、なんだってできる。ふと外に目をやると他のスポーツを観戦することもできる。スポーツをするのが好きな人も見るのが好きな人も気軽に來ることができる、名古屋の新しいシンボルとなるスポーツの楽園をデザインする。"みせる""みられる""みれる"をイメージした空間。



大橋 亮太  
Ryota Ohashi

村田ゼミ

### モ・ダン ～モザイクアート×だんじり～

羊毛をフェルト化させカーベットを製作  
羊毛は暖かく、手触りも良い。フェルトとしても使える  
素晴らしい素材  
絵のデザインはだんじり。  
だんじりに込められた熱い男の魂でより暖かく。



岡田 千枝  
Chie Okada

村田ゼミ

### ほっとひといき。 ～ひつじたちのおもてなし～

最近は家族がひとつの部屋に集まり話をすることが減少している。それを羊の持つあたたかさ・やわらかさで、みんなが集まり仲良く話をしたりすることのできる空間を作り、そこでみんなで「ほっと、ひといき。」



黒松 美保  
Miho Kuromatsu

加藤ゼミ

### 前向きになれる病室のインテリア ～奈良県立医科大学附属病院～

病室の環境は生活に必要な最低限のものを揃えただけ。平均で18日間入院する病室。そんな空間でいいのだろうか？ 編み物、読書、絵を描くことを楽しみにしたり資格を取るために勉強したり、病室でできる趣味は限られているが、入院してから新しい趣味を見つけてもいいと思う。同じ趣味を持った人たちで集まって話したり。思う存分自分の好きな趣味に没頭できる部屋、自分だけの空間。これからの病院に重要なのは治療を頑張ろうと前向きになれる空間。そんな空間をつくりたい。



阪口 佐知子  
Sachiko Sakaguchi

加藤ゼミ

### Four Seasons House ～ nLDK から (LDK)<sup>n</sup> の都市住宅 ～

『住宅』に住む「家族」の多様化は進むものの、『住宅』は個性を失いつつある。従来の住宅形式 nLDK から新しい住まいの形として、いくつかのLDKが存在する (LDK)<sup>n</sup> 乗の住宅を設計。春・夏・秋・冬をインテリアコンセプトとして計画。



佐藤 唯  
Yui Sato

加藤ゼミ

### 光を編む～ハットランプ～

光を編むことなんてできるんだろうか…。  
麻ひも・毛糸を使って、光を編む。  
編むことで柔らかい光をつくる。  
帽子のカタチをしたランプが優しい光を編む。



佐藤 信也  
Shinya Sato

加藤ゼミ

### 水辺のアート ～ Candle Box ～

デザインでの4年間は“穏やか”で“暖かい”ものだった。  
「この制作を思い出にするのではなく、この制作で思  
い出に耽ってもらおう。」  
その思いをアートとして形作った、  
火と木と水の穏やかな演出。



澤井 宏実  
Hiromi Sawai

村田ゼミ

### Cute Cotton Costume 綿つくり・糸つくり・布つくり

数ある素材の中でも飛びぬけて肌にやさしい綿。  
綿素材のやさしさ・あたたかさ全てを衣服で表現した  
い。綿素材をやさしく・あたたかく感じたそのときに  
そっとやさしくあたたかい心が生まれるように。

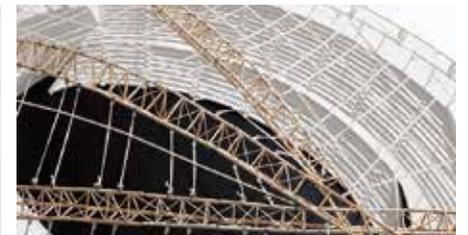


四方 祭生  
Satsuki Shikata

中山ゼミ

### 3C chair

子どもが自分で組み立てて楽しくなるような椅子を考えました。  
好きな場所に置いて、そこが特等席になればいいなという思いを込めて作りました。

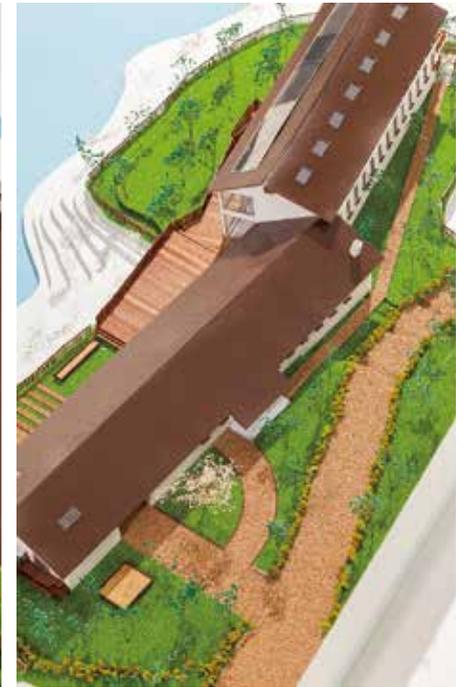


相馬 克志  
Katsushi Soma

藤井ゼミ

### リーフアリーナ ～2064年大阪オリンピックへ～

世界最高峰の祭典オリンピック。  
開催国では世界各国の人々が集まり、賑わう。  
それぞれの競技で飛び交う声援と選手たちの歓喜の声は響きわたる。  
来るべく未来の栄光に期待を寄せて、その祭典にふさわしい競技場を。  
2064大阪オリンピックへ。



高橋 恵理香  
Erika Takahashi

加藤ゼミ

### break time square

都市に自分の居場所をつくる。お昼ご飯、仕事、リフレッシュ。人それぞれの過ごし方を同じ空間で共有する。働く人のための休息地であり、またある時はイベントや祭り空間となる。多様な顔を持つ、開かれた場所。



武智 千佳  
Chika Takechi

加藤ゼミ

### Kioセミナービレッジ — 不思議の森公園に建つ畿央大学保養所 —

『自然あふれる環境 教室とはまた違った雰囲気の中で仲間と寝食をともにすることにより楽しく過ごせる場を』ゼミやサークルの合宿に気軽に利用できる！保養所というより別荘！みんなで食事を作り、語り合いながら楽しい時を過ごし、自然と触れ合いながら安らげる場を創りたい。



武村 安里紗  
Arisa Takemura

村田ゼミ

### 帽子相愛 ~ hat · heart · hermoney ~

帽子は、単に防寒や日よけのためだけのものではない。私にとって帽子は、装いにアクセントを与えてくれる素晴らしいもの。ひとつひとつの帽子に愛を込め、18個すべてに違った個性が出るようにしました。



多湖 初菜  
Uina Tago

中山ゼミ

### Green Hotel

建物自体が公園や庭園のように緑に溢れ、宿泊する部屋以外にも憩える居場所のある宿泊施設。



田中 康介  
Kosuke Tanaka

藤井ゼミ

### 吉野郡阿知賀全寮制小学校

奈良県吉野郡は少子高齢化に伴い、小学校が減少している。自宅から通える距離にある小学校は廃校になり、自力で通う事が難しくなっている。通学の負担を減らし寮での共同生活を体験する自然の中で学ぶ全寮制小学校を計画する。



玉山 真梨子  
Mariko Tamayama

藤井ゼミ

### Houses for Every Life Stage ～ 個室賃貸型分譲住宅の提案～

ライフステージに応じて、個室を付けたり切り離したりできる集合住宅。新婚時は1LDK、生まれた子供の人数により個室を増やすことができる。子供達が巣立てばまた1LDKに戻すこともできる。



辻井 景子  
Kyoko Tsujii

加藤ゼミ

### Cloth jewelry

クロスジュエリーとは、主に布を使用し素材価値が低く再利用しにくいアクセサリと、どれだけ年数が経っても再利用できるジュエリーを統一したもの。その日のファッションに合わせるものから、ジュエリーでファッションを決める時代へ…



辻川 貴子  
Kiko Tsujikawa

加藤ゼミ

### イス・すき・いす・スキ

入学前に先輩方の卒業作品の椅子を見て私もこんなイスを作りたいと思っていて単数でも複数でも使える人の絆を視覚化したイスを卒業制作に決めました。「人」にみたく、様々なタイプに変化できるのも特徴です。初めは、加工が上手くいかず、木材が割れたりと試行錯誤しながら取り組みました。色の配色など計画していた図面通りに制作することができてよかったです。



濱田 万弥  
Maya Hamada

村田ゼミ

### 憧れ ～フリージア. 大人への階段～

今年のKDKコンテストのテーマと同じフリージアの花言葉でもある「あこがれ」のイメージをもとにフリージアの花を右全体に多く使い、女性らしさと美しさを取り入れたドレスとなっている。そんなドレスの概念を通じて、女性本来が持つ美しさを表現している。



平井 菜美子  
Namiko Hirai

加藤ゼミ

### 椅子の修復と再生 ～私のリフォーム～

古くても美しい思い出が詰まった家具を修復・再生した。家具が安価で使い捨てられることが多い現代に、次世代まで愛される家具を。家具に長生きしてもらいたい。思い出が詰まった家具を甦らせたい。



矢部 豊  
Yutaka Yabe

加藤ゼミ

### おとん

おとんは怒っている。  
何に怒っているかって？  
家族の中で蔑ろにされているからさ。  
そんなのひどいだろう？  
どうなってるんだ、どうなってんだよー！



坂口 友祐  
Yusuke Sakaguchi

## 関西における設計者と居住者を対象とした 24時間機械換気システムに関する意識調査

### 【はじめに】

我々の暮らしを考える上で「空気」というものは避けては通れない。

1990年代からシックハウス症候群が社会問題化し、その対策として2003年に改正建築基準法が施行された。内容としては①内装仕上げの制限、②天井裏などの制限、③クロルピリホスの使用禁止、④24時間機械換気システムの設置義務付けである。実際これらは効果的に動いているのだろうか？そこで関西の戸建住宅を対象とし、設計者とその施主に24時間機械換気システムに関するアンケートを行い、意識や稼働状況に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。

### 【24時間機械換気システムとは】

24時間機械換気システムとは一般の戸建住宅において必要換気量である0.5/h回の換気量を確保する為に、窓の開放による自然換気とは異なり、換気扇などを用いて行う機械換気を24時間常時稼働させることを目的として設置される換気システムのことである。以下、常時換気と表現する。

### 【調査概要】

調査対象：関西の設計事務所、工務店等に勤務する設計者とその施主である居住者

調査方法：自記式質問紙調査（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県の各建築士会、日本建築家協会近畿支部、大阪府建築士事務所協会に設計者1部・居住者3部を1セットとし配布を依頼・各自郵送による回収）

有効回答数：設計者88部・居住者76部

調査期間：2011年11～12月

調査項目：設計者（設置義務付けに対する賛否、常時換気の施主への説明内容、常時換気の運転予測、望ましいとするメンテナンス頻度等）居住者（常時換気稼働状況、設計者から常時換気に

対する説明を受けたか、説明書を読んだかどうか、メンテナンス頻度等）

### 【調査対象者の概要】

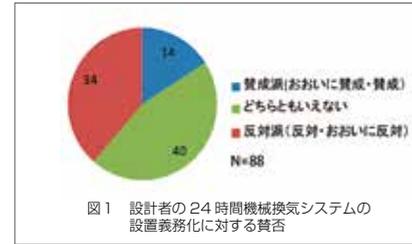
設計者：男性83%、女性17%で、設計事務所勤務しているのが82%であり、注文住宅を主な業務としていた。年齢は40代が31%、30代が27%、50代が24%で、経験年数は11年～20年が最も多く82%であり、法改正前後に渡り業務に携わった人が大半を占めた。

居住者：男性43%、女性53%であり、居住地域は滋賀県が32%、和歌山県が24%、兵庫県が14%、大阪府が12%であった。年齢は30代、40代がそれぞれ30%程度で、木造住宅居住者が86%であった。

### 【設計者の結果・考察】

設計者の大半が「水回りの換気扇+各室の自然給気口」を採用し、給気口は全開から全閉まで調整できる機種を選定率が8割程度を占めていた。常時換気に対する賛否としては「どちらともいえない」という意見が一番多く、賛成派より反対派の方が多かった（図1）。賛成派の自由記述としては「住宅の気密性が上がっているから」、「建材だけでなく日用品にも化学物質が含まれているから」、反対派は「スイッチを切っているのが実状だ」、「維持、管理に問題あり」という意見が挙げられた。既往研究と比較して反対派が多かったのは比較的温暖な関西の戸建て住宅を対象とした調査であったことが影響したと推察される。

施主への常時換気の説明内容は、「常時運転」が多いものの、「適宜運転・停止」の回答も多かった。賛否と説明内容の関連性については、賛成と回答している設計者が「常時運転」と説明しているのに対し「どちらともいえない・反対」と回答している設計者は「適宜運転・停止」の説明が多かった（図2）。



### 【居住者の結果・考察】

常時換気に対する認知度として、設計者からの説明は「入居前に受けた」という回答が一番多かったが「わからない」の回答の多さも目立った。説明書に関しては「読んだことが無い」の回答が圧倒的に多かった。満足度を聞いた質問では「満足」という回答が多かったが、不満という回答も一定数あった。常時換気について気になる点を複数回答でたずねると「電気代」「暖冷気の流入」が多く回答され、稼働状況を季節別にみると冬季に停止されるケースが多かった（図3）。

### 【設計者と居住者の結果・考察】

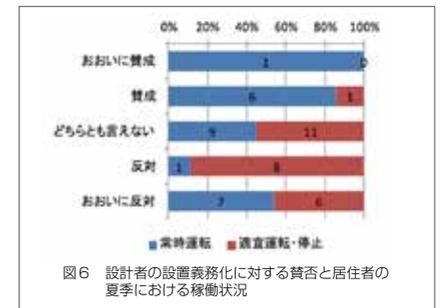
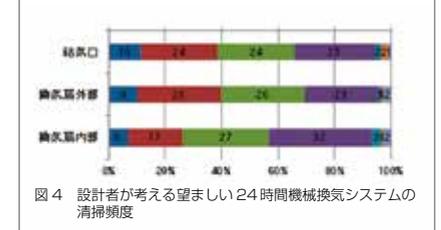
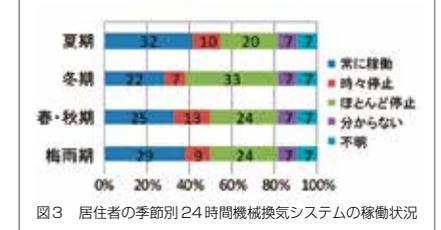
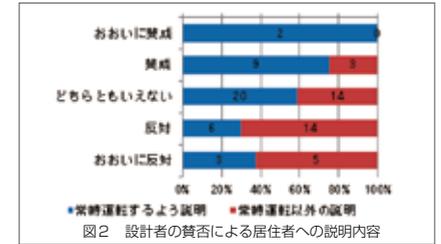
設計者による常時換気の施主の運転予測は「間欠運転」が多かったのに対し、実際の稼働状況は「ほとんど停止」の回答も多かった。メンテナンスに関しては、設計者が「半年に一回」、「一年に一回」の頻度で清掃するのが望ましいと答えているのに対し、居住者は「実施したことが無い」の回答が多く見受けられた（図4・図5）。また、今回主な調査対象であった設計事務所等の設計者と施主との関係においては、設計者自身の常時換気に対する賛否が施主の稼働状況に影響を与えることがわかった（図6）。

### 【おわりに】

設計者の常時換気に対する賛否の自由回答の中には法改正自体に異議を唱えるものもあり、設計者が効果や有用性を納得することが、法改正が期待した居住者の換気行為を促すといえる。その他、メンテナンスが適切に行われていない事など、効果的な常時換気システムの稼働を妨げる課題があることもわかった。

### 謝辞

調査にご協力いただいた建築士会（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県）、日本建築家協会近畿支部、大阪府建築士事務所協会、その他の関係者の方々に深く感謝いたします。





助川 渚  
Nagisa Sukegawa



福本 悠美  
Yumi Fukumoto

## 新しいタイプの高齢者住宅 ～サービス付き高齢者向け住宅に関する事例調査～

### I はじめに

2011年、サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）が新設された<sup>注1</sup>。建設費補助や税制上の優遇を受け、短期間に整備が進みつつある。本研究は、サ高住の建築計画やサービス内容を把握することにより今後の計画に資することを目的としている。

### II 研究方法

奈良県内のサ高住から協力の得られた5カ所を訪問し、ヒアリング調査とアンケート調査を行った。

### III 考察

事業主体は、事例Dのみ医療法人、他は株式会社である。戸数は8戸から92戸と住宅規模の差は大きい。住戸は浴室、台所が設置された「住戸型」が2事例、「居室型」は3事例である。サービス面では、全事例で食事サービスが実施され希望に応じ提供されている。全事例で有資格者が日中、夜間を問わず常駐している。が、住戸数に相異が見られる中で、有資格者1人当たりの入居者数には相異がある。料金設定の面では家賃、共益費、サービス費が大きく異なる。家賃は3万5000円から13万7000円に分布する。



事例A 4階平面図

台所・浴室が共用の「居室型」である。ワンフロアに住戸やこれら共用スペースがある。

面積や立地条件が異なるため1㎡当たりの家賃を各事例近くのワンルームマンションの家賃と比較すると、概ねワンルームマンションの2倍の家賃が設定されていることが把握できた<sup>注2</sup>。共益費は月額1万円から9万9750円と幅が大きい。その内容は5事例ともに共用部分の管理費であり、事例Aのみ各住戸の光熱水費が含まれる。分譲集合住宅の管理費の場合、住戸数が少ないほど管理費は高い傾向が見られ同様の傾向がサ高住でも認められる。さらに共用空間の面積も事例により異なるため、共用空間の総面積を全住戸分の共益費の合計で割ると1㎡当たりの管理費として1400円から5215円の間で設定されていることが分かった<sup>注3</sup>。費用や徴収システムがもっとも異なるのがサービス費である。3事例が一律徴収であり、清掃、洗濯等家事全般が提供されるが金額の差が大きく、また、要介護度

表2：5事例の入居者の属性

		A n=8	B n=6	C n=39	D n=23	E n=57
性別	男	1(12.5)	4(66.7)	8(23.7)	9(39.1)	13(22.8)
	女	7(87.5)	2(33.3)	25(76.3)	14(60.9)	44(77.2)
平均年齢		88歳	75.6歳	80.4歳	82歳	83.3歳
平均入居年数		1年4ヶ月	2ヶ月	1年6ヶ月	4ヶ月	1年9ヶ月
要介護認定	自立	0	0	26(66.7)	3(13)	15(30.6)
	要支援	1(12.5)	3(50)	8(20.6)	8(34.8)	19(38.8)
	要介護軽度	1(12.5)	1(16.7)	5(12.8)	9(39.1)	7(14.3)
	要介護重度	6(75)	2(33.4)	0	3(13)	8(16.3)
入居直前の住まい	自宅から	4(50)	3(50)	38(100)	16(69.6)	43(76.6)
	病院から	3(37.5)	2(33.3)	0	6(26.1)	5(8.9)
	施設から	1(12.5)	1(16.7)	0	1(4.3)	8(14.3)
子どもの有無	いる	8(100)	6(100)	26(68.4)	22(95.7)	48(84.2)
	いない	0	0	12(31.6)	1(4.3)	9(15.8)

が異なる中で家事サービスを受けない入居者も一律に負担しているようだ。事例C、Dは利用するサービスの内容、時間によりサービス料が規定されている受益者負担となっている。

次に、入居者対象のアンケート調査結果を述べる。事例A・B・Dは、職員の方に、事例C・Eは入居者ご本人にアンケートを回答していただいた。

高専員から移行した事例A・C・Eとサ高住として新設された事例B・Dでは平均入居年数は異なる。要介護認定については、住宅による差は大であり、どのような高齢者を入居対象としているか異なることが表れている。

事例C・Eは入居者に回答いただいたので住宅や生活満足度等を把握することができた。その中で住宅内の友人数は図1に示すように「なし」と回答した方が両事例ともに多い。「ともだちが作りにくい」と自由記述にも述べられており、高齢者とともに住む利点を活かし、住戸内の生活に閉じこもることのないような取り組みや共用空間のあり方が求められる。

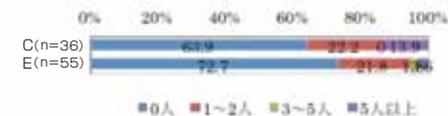


図1：入居住宅の友人数

### IV まとめ

5住宅という限られた事例調査であったがいくつか相違点が把握できた。まず、戸数制限がないため住宅規模が異なり、それに伴い共益費に差が生じている。住戸は台所・浴室が設置された「住戸型」と共用の「居室型」に分類され、「居室型」の方が入居者の身体状況が低い傾向が見られる。料金面ではサービス費の内容が分かりにくい。システムとしては一律徴収が応益負担か、さらに料金設定に相異があり、現在の情報開示の内容では理解することが困難であることが指摘できる。

注1 床面積25㎡以上(台所、浴室が共用の場合18㎡以上) 便所、洗面所は必置。サービスは安否確認、生活相談は必置。

注2 事例Bは敷金300万円の内還付されない30万円とは別に還付される270万円を180ヶ月で均等割した1万5千円を家賃と見なすと他事例と同様の2倍程度の家賃設定となる。

注3 事例Aのみ共益費に各住戸の光熱水費が含まれている。その分を月額2000円程度として差し引くと、1400円から3500円程度の分布となる。

表1：事例概要と料金設定

事例	開設年	全戸数	階高	住戸部分の規模	浴室	台所	共用面積 <sup>※3</sup>	家賃
A	2010年11月 <sup>※1</sup>	8戸	4階	18.65~29.38㎡ <sup>※2</sup>	×	×	153㎡	7万~11万5000円
B	2012年4月	14戸	3階	18.13~18.83㎡	×	×	378㎡	3万5000円
C	2008年5月 <sup>※1</sup>	49戸	7階	34.30~54.80㎡	○	○	947㎡	8万~13万7000円
D	2012年3月	41戸	4階	18.18~34.57㎡ <sup>※2</sup>	×	×	746㎡	6万5000~6万9000円
E	2009年2月 <sup>※1</sup>	92戸	5階	24.70~30.15㎡	○	○	257㎡	9~11万円

※1 高専員としてスタート ※2 二人部屋 ※3 共用面積 共用空間の総面積(廊下、階段等も含む)の概算

1㎡あたりの家賃	周辺の賃貸住宅の家賃	共益費	食費	サービス費	敷金	1か月あたりの生活費
3753~3914円/㎡	1600円~2212円/㎡	9万9750円	5万7750円	5万2500円	21万円	28万円
1859~1930円/㎡	835円~1445円/㎡	3万4000円	3万9000円	1000円	18万円	10万9000円
2448~2500円/㎡	1796円/㎡	5万5650円	5万1000円	※4	300万円	18万6650円 <sup>※5</sup>
3575~3963円/㎡	1686円~1764円/㎡	3万円	4万5000円	※4	19万5000円	14万円 <sup>※5</sup>
3610~3648円/㎡	1429円~1855円/㎡	1万円	4万950円	3万1500円	なし	17万2450円

※4 料金設定が細かく、個人差がある ※5 サービス費を除く



田中 純樹  
Junki Tanaka



藤戸 禎寿  
Sadatoshi Fujito

## ボウリングの熟達における自己調整学習の事例研究

### 1. 目的

特定の技能が速く正確になることを熟達(expertise)という。人が特定の技能に熟達していく過程において、自己調整学習(self-regulated learning)が生じると、シャंकとジマーマン(2009)は指摘している。自己調整学習は、準備局面-遂行局面-反省局面の循環過程として表現できる(Zimmerman, 2006, Figure 1)。準備局面(forethought phase)において、人は目標設定やその達成へのプランを構築する。この局面には自己効力感などの動機づけや信念が大きく影響する。実際の技能に関する課題に取り組み練習するのが遂行局面(performance phase)である。この局面では課題遂行および下位課題の結果に関するモニタリングが行われる。この局面において人は自己教示をしたり、練習環境や課題を構造化したりする。反省局面(self-reflection phase)において人は自己評価を行ったり、その原因帰属を行う。この局面の自己評価に基づいて、人は満足や達成感を味わい、反省を生かして次の準備局面における目標設定や達成へのプランを構築しなおす。すなわち、ビジネス場面で言われるPDCAサイクル(計画Plan-実行Do-評価Check-改善Act)が技能の学習において生じているのである。



Figure 1.  
自己調整学習の循環過程  
(Zimmerman, 2006)

ただし、これまでの研究において、自己調整学習の循環過程はともすると理想的な学習者が行う規範としての理想像に陥りがちであった。実際にデータとして循環過程を示した研究は今まで見当たらないからである。例えば、畿央大学人間環境デザイン学科の卒業研究において、牛房・坂口・鈴木(2010)はボール投げ課題を用いて循環過程を示そうとしたが、失敗に終わった。諏訪(2007)はダーツ課題で循環過程を

示そうとしたが、その循環は質的データにとどまっており、量的なデータで循環過程を示せてはいない。

この原因として次のことが考えられる。(1) 質的データとしては練習に伴った変化が見られるが、参加者の従事する課題成績の上昇が少なくとも6カ月(半年)以上練習しなければ見込めない。(2) 研究として統制するために、日常生活で実際に行われるゲーム課題と解離した恣意的なルールとして課題をデザインするために、実際に行われるゲームの技能と研究における課題の技能とが双方向で転移しない。(3) 実際に人が熟達への動機づけを持っているのは日常生活で実際に行われるゲーム課題であり、研究における課題ではない。(4) 循環過程は生活習慣としての側面を大いに持つため、ある程度の練習習慣が身につくまでから循環過程についてのデータを取り始める必要がある。

われわれはボウリングを趣味としていて、ボウリングを「もっと上手になりたい」と願う者である。そこで、本研究はわれわれ自身をみずから研究参加者として、実際のボウリングの練習を9カ月間行い、以上の問題点を克服した際に、自己調整学習における循環過程を個人内変動として量的に示せるかどうかを事例研究した。また、その際に質的な側面として、練習の当事者にしか感知できない1人称視点での内省と気づきの記述を試みた。

### 2. 研究

研究参加者: 田中純樹・藤戸禎寿の2名

研究期間と練習場所: 2012年4月25日~12月24日まで、上牧町のボウリング場でボウリングを1日4ゲーム行い、ゲームを録画した。田中は32日・計128ゲーム、藤戸は33日・計132ゲームを行った。なお、7月5日~8月29日にかけて、ボールとシューズを購入した。これ以降は個人用のボールとシューズで練習を行った。

遂行局面の指標: ボウリングのスコアであった。

反省局面の指標: 録画された動画を事後的に観覧しながら、参加者は7段階評定(非常にうまくいった~まったくうまくいかなかった)を行った。評定はゲーム単位(12問)、フレーム単位(5問)、ワンスロー単位(8問)でレベル化した。(5月以降)

準備局面の指標: 自己調整学習の循環過程を実際に

示すために、練習開始から約6カ月後の9月20日以降においてゲーム、フレーム、ワンスローのスコア予言値を測定した。したがって、循環過程の測定に関して、田中は17日・68ゲーム・680フレーム分、藤戸は18日・72ゲーム・720フレーム分のデータを収集した。

### 3. 結果と考察

#### (1) 熟達の検証

ボウリングの熟達を明らかにするために、1日4ゲームのスコアの平均値を算出した。Figure 2に練習開始からの日数の関数としてのスコアの変化を示す。直線はスコアを目的変数、日数を説明変数としたときの回帰直線を、数式は回帰直線の傾きと切片を、 $R^2$ は説明された分散の割合を示す。回帰について検定を行ったところ、田中[F(1, 30)=11.34,  $p<.01$ ]、藤戸[F(1, 31)=12.50,  $p<.01$ ]といずれも有意であり、練習に伴う熟達の効果が認められた。回帰直線からの推定では、田中は約33点、藤戸は約32点の伸びを示している。実際のスコアを見る限りでは、おおよそスベア2つ分(10点+次回の1投目の点)の熟達であったと見なせる。

#### (2) 準備-遂行-反省の循環過程に関する指標間の相関

デイ(日)、ゲーム、ワンスローの各レベルにおける準備、遂行、反省の各指標間の相関係数を算出した。デイレベルにおいて、遂行指標は1日4ゲームの平均スコアを、反省指標はゲームに関する12問×4ゲームの評定値の平均を、準備指標は1日4ゲームのスコア予言値の平均を用いた。ゲームレベルにおいて、遂行指標は各ゲームのスコアを、反省指標はゲームに関する12問の評定値の平均を、準備指標はゲームのスコア予言値を用いた。ワンスローレベルにおいて、遂行指標は各フレーム1投目のスコアおよび前フレームのスコアを、反省指標はワンスローに関する8問の評定値の平均を用いた。準備→遂行間、遂行→反省間、反省→(次回の)準備間で相関が有意であれば、自己調整学習の循環過程を量的に示せたことになる。その結果、田中においてはゲームレベルで、藤戸においてはデイレベルで、以上の相関が有意であった(Figure 3)。したがって、条件を整えれば、自己調整学習の循環過程を量的データとして示せることが明らかとなった。他にも、ゲームレベル、ワンスローレベルにおいて、田中・藤戸のいずれもスコアと次回の予言値との相関が有意であり、直近の結果に基づいて準備過程における目標設定を変えることが明らかとなった。

相関を見る限りでは、田中においては1日の練習の中で反省を生かして目標設定を変える傾向が強く、藤戸においては日々の練習間で反省を生かして目標設定を変える傾向が強いといえる。

#### (3) 1人称視点での内省と気づきの傾向

内省を見る限りにおいて、田中・藤戸の両者は内省の対象が異なっている点が特徴的である。すなわち、田中はレーンコンディションや体調に帰属しがちでゲーム全体を取り巻く状況に注目した記述を行う傾向があるのに対して、藤戸はゲーム全体を取り巻く状況を見無視してみずからの投球フォームに注目した記述を行う傾向がある

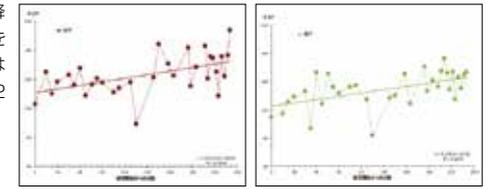


Figure 2.  
練習開始からの日数の関数としてのスコア(左:田中, 右:藤戸)

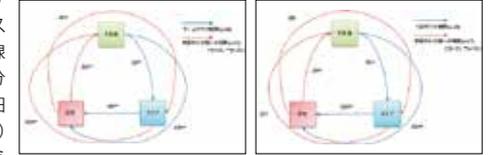


Figure 3.  
循環過程としての各指標間の相関  
(左:田中(ゲームレベル), 右:藤戸(デイレベル))

のである。これは、練習最終日の12月24日の記述に特に顕著にあらわれている。

#### 田中の内省(12月24日)

“……私にとってはとてもやりやすいレーンだった。今回がビデオ撮影最終日ということもあり体調などをベストコンディションに上げてきた。”

#### 藤戸の内省(12月24日)

“……4ゲーム目のフォームは重心のぶれもほとんど無く、バランスがかなり安定しており……この日のフォームは自分が理想とする形が4ゲームまで継続できていた。”

#### (4) まとめ

指標間の相関と内省の対象とをあわせて考察すると、田中においては、みずから制御可能な環境も含めて、ゲームを取り巻く状況に注目しているがゆえに、1日の中でのゲームレベルにおける循環が生じていたのではないかと考えられる。これに対して、藤戸においては、みずから制御可能な事象に注目しているがゆえに、日々の練習間のデイレベルにおける循環が生じていたのではないかと考えられる。

### 4. 結論

以上の通り、本研究は、自己調整学習の循環過程を量的データとして示すことに成功した。また、田中・藤戸のあくまで2事例ではあるが、実際の循環過程をマクロ(デイレベル)、メディアム(ゲームレベル)、ミクロ(ワンスローレベル)というように、レベルを変えて記述した場合に、どのレベルで循環過程が生じるかについての個人差の可能性が示唆された。これまでの研究は自己調整学習の循環過程が生じるか生じないかという点を強調していたが、本研究において、自己調整学習が生じた場合の循環過程の違いをも含めて、データとして示せたことの意義は大きい。自己調整学習の循環過程は、理想的な学習者が行う規範としての“実現のかなわない”“ありえない”理想像ではなく、実際に生じうる現象なのである。



中辻 淳  
Atsushi Nakatsuji



水脇 卓也  
Takuya Mizuwaki

## 大学生の自室の家具配置に関する研究 ～生活行為に着目した家具レイアウトパターンの考察～

### I はじめに

自室の満足度を規定する要因として、部屋の広さや方位、窓の位置や日照・通風、内装材等の建築的要因だけでなく、自身の好みで変更可能な家具選択やそのレイアウトがある。小学校入学を機に自室を与えられるケースが多いが、社会変化や成長に伴う行動の変化とともに自室に望む内容も変化すると考えられる。そこで私たちは、大学生を対象とした現在の自室に関する実態把握とともに個人のライフスタイルや自室で行う生活行為に着目し、理想の自室における家具選択やレイアウトとの関連性を検討し、パターン分類を試みることにした。

### II 現在の自室に関する実態調査

調査対象：奈良県内K大学学生  
調査方法：質問紙法による集合調査  
調査時期：2012年7月  
調査項目：個人の基本属性、自室の概要（広さ・窓数・収納有無）、満足度、平日・休日の滞在時間（睡眠時間除く）、保有する家具・電化製品の使用年数と必要度  
調査結果：有効回答数は137で、男性62、女性75であった。現在の自室の広さは6畳が36%と最も多く、次いで6畳未満が17%、7.5畳・8畳はそれぞれ11%程度であった。満足度は、「とても満足」が約38%、「とても不満」が16%で満足側の回答が多かったが、広さと満足度との関係を見ると、「とても満足」は7.5畳で最も多く、6畳未満が最も少なかった（図1）。睡眠時間を除く平日における自室の滞在時間は、1～2時間が36%を占めたが、長時間滞在するとの回答もあった。休日では平日より回答

のばらつきが大きくなり、ライフスタイルによる個人差があることがわかった。現在自室にある家具・電化製品で7割以上の保有率であったのが、ベッド・学習机・本棚等、半数以上が洋服ダンス・収納棚等であった（図2）。これらの必要度（絶対必要と必要の回答計）をみると保有率の結果と違いがあり（図3）、保有しているが不要と思うものや、必要であっても保有していないものがあることがわかった。これらの結果をもとに理想の自室に必要なと考えられる空間・家具・電化製品やライフスタイルとして調査すべき項目を選定し、箱庭調査に向けた準備を進めることにした。

### III 理想の自室に関する調査

調査対象：奈良県内K大学学生（男性16名、女性14名、計30名）  
調査方法：箱庭手法による調査およびアンケート調査  
調査時期：2012年12月  
調査概要：箱庭手法：7.5畳と8畳の室模型（南向き・窓数2・収納1・床フローリング設定）および家具・電化製品20種の1/10模型を作製し、室条件等の説明の後、「居心地がよい空間となるように家具を置いてください」と教示し、時間の制約なく作業してもらった。  
アンケート項目：個人の基本属性、自室で行う生活行為、来客頻度、在室時に最も長い場所等  
調査結果・考察：7.5畳では平均7.2個、8畳では平均7.9個の家具が使用され、両条件ともにベッドとテレビの選択率が高かった。ベッドは単に寝るための家具でなく、居場所として様々な用途に使用されており、選択率・必要度ともに

高い家具といえる。家具占有率は自室の滞在時間が長いと大きくなる傾向があった。起居様式では全体として椅子座より床座の割合が高く、8畳条件では8割が床座であった。家具配置をパターン分類するため、家具配置の傾向とアンケートによる生活行為との関係性を探索的に検討した。生活行動のうち活動時間（自室滞在時間から睡眠時間を除いた時間）と来客頻度には個人差が大きく、他の生活行為との相関性も認められたことからこれらに着目した。その結果、活動時間と来客頻度の2軸上にプロットした分類パターンとベッド・テレビ・パーティション配置と空間の空きとの間に関係を見いだすことができた（図4）。

### IV まとめ

今回の箱庭手法による調査において、ひとつとして同じレイアウトはなかったが、生活行為との関係性を探索的に検討することでパターン分類することができた。限られた条件・対象の中での結果であるため今後様々な対象者・室条件における検討が必要であるが、本研究が20代前後の若者の快適な居場所づくりに資することができれば幸いである。

謝辞：調査にご協力頂いた学生の皆様に御礼申し上げます。

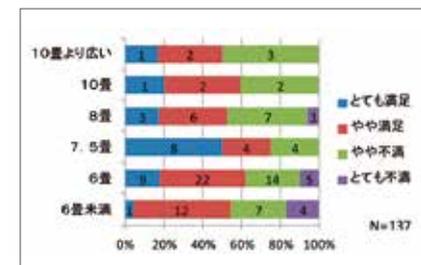


図1 現在の自室の広さと満足度

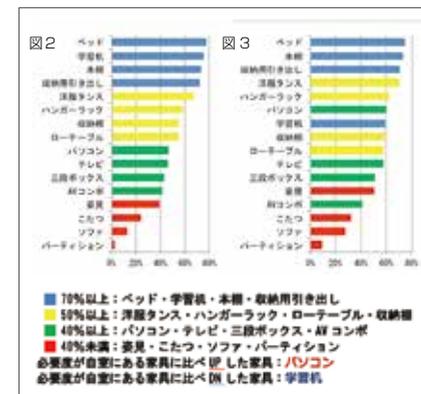


図2 現在の自室における家具・電化製品の保有率  
図3 自室における家具・電化製品の必要度

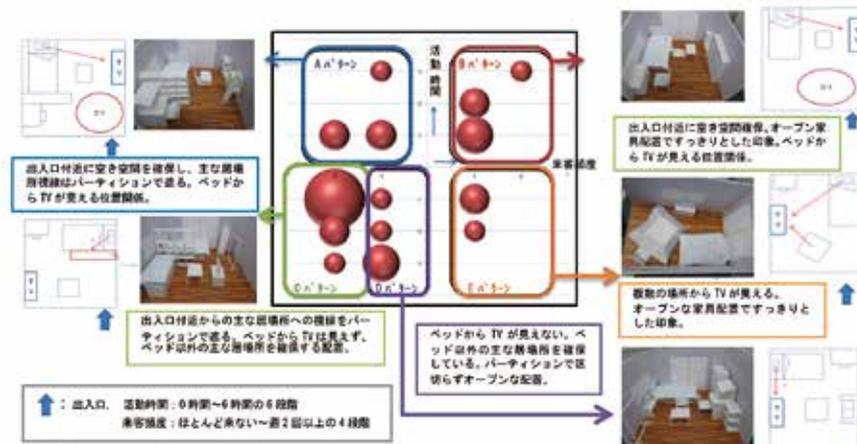


図4 生活行為と家具レイアウト



橋本 淳矢  
Junya Hashimoto

## 夏期における高齢者の温熱環境と生理量の実態調査

### 【はじめに】

高齢者の室内温熱環境の問題点に関しては、これまで冬期の寒さや室間の温度差による血圧変動等の問題が多く指摘されてきた。しかし近年では暑熱による健康障害、なかでも熱中症発生率の増加が著しい。従来、職場や屋外での活動時の発生が多く報告されてきたが、最近の発生場所は「家中、家の庭」が最も多く、世代構成別では60代以降で急増する傾向にある。一般に高齢者は加齢に伴い運動機能のみならず様々な生理心理機能の低下が生じるので、住み慣れた住まいで健康で安心して快適に生活するためには、機能低下に対応した適切な対策が必要である。設計上のバリアフリーは主に運動機能低下に対応するものであるが、生理機能低下に対応するためには環境整備が欠かせない。なかでも熱環境は人の体温調節機能と大きな関わりを持ち、命を左右する要因である。WBGTを用いた温度指針も示され、子どもと高齢者は基準を1段階下げる必要があるとの指摘もある。WBGTとは人体の熱収支に影響の大きい気温、湿度、輻射熱の3つを取り入れた指標で、乾球温度、湿球温度、黒球温度により算出する。本研究では、高齢者の夏期における日常生活下の温熱環境および生理量の実態を把握し、生活環境や住まい方のあり方を検討するための基礎データを得ることを目的とする。

### 【調査概要】

- ① 集合法によるアンケート：個人属性・住環境属性・日常生活の概要・環境調節行動・熱中症に関する知識等
  - ② 生活活動調査（行動・居場所）、その際の主観申告（温冷感・快適感・許容度）
  - ③ 活動量（身体活動量・運動レベル）：ライフレコーダース（SUZUKEN製）：測定期間中携帯
  - ④ 室内温熱環境（居間・台所・寝室の温度・相対湿度）：サーモレコーダー（RS-13エスベック製）：測定期間設置
  - ⑤ 人体周囲環境（温度・相対湿度）：サーモレコーダー（RS-13エスベック製）：測定期間中携帯
  - ⑥ 皮膚温（Ramanathanの4点法：胸・腕・大腿・下腿）：サーモレコーダー（RT-13エスベック製）：測定期間中携帯
- ②～⑥は連続した3日間実施し、中日の1日を分析対象とした。測定機器は2分間隔の自動計測とした。  
調査時期：2012年7～8月

### 【調査対象者の概要】

調査①の調査に参加した30名（男性15名・女性15名；公益社団法人奈良市シルバー人材センターに依頼）のうち、男性に②～⑥の調査を依頼し、協力の同意が得られた5名とボランティア1名の計6名とした。比較対象として20代男子大学生6名に調査を依頼した。対象者は高齢者・若齢者ともに健康に日常生活を送っており、高齢者は65歳～82歳で全員奈良市内に居住し、若齢者は21～24歳で居住地は奈良県、大阪府内であった。

### 【結果・考察】

室内温熱環境測定結果の平均値と偏差を図1に示す。図中の色はWBGT指標（赤：危険域、橙：重警戒域、黄：警戒域、水色：注意域、青：安全域）である。高齢者と若齢者を比較すると、平均で温度差は約2℃、湿度差は約10%であり、特に寝室環境の差が顕著であった。個人差はあるが高齢者は全体的にWBGTが高く、No.2は偏差上限値が警戒域を超えていた。

代表事例として高齢者No.4と若齢者No.10における1日間の測定結果の経時変化を示す（図2）。上から順に、人体周囲温度、居場所、生活行動、環境調節、温冷感、快適感、許容度である。人体周囲温度を比較すると高齢者のほうが高温で、WBGTが警戒域を超える時間が長かった。皮膚温をみると若齢者は活動状態や環境変化によらず躯幹部（胸部）の温度変化は小さいが末梢部（腕・下腿）の変化は大きく、環境の変化に応じた体温調節が行われていた。高齢者の胸部皮膚温は運動時の低下だけでなく安静時にも変動がみられた。高齢者は人体周囲温度が27℃以上でも皮膚温34℃以下が多く出現し、大学生は27℃以上ではほとんどが皮膚温34℃以上で放熱による体温調

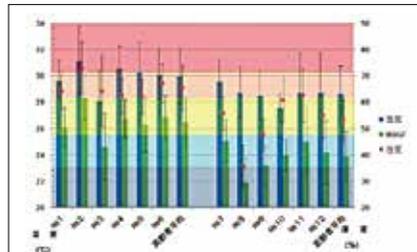


図1 室内温熱環境測定結果の平均値・偏差

節が行われているという報告<sup>1)</sup>があるが、本調査においても同様の事例がみられた。環境調節の状況では、高齢者のエアコン使用時間は短く、高温多湿の環境下で生活していた。さらに温冷感・快適感申告に変化や頻度が少なく感受性の低下がみられ、暑い環境でもそれを許容する人が多かった。

図3に、被験者全員の胸部皮膚温の平均値と標準偏差をまとめて示す。高齢者の胸部皮膚温平均値は若齢者に比べて低く、変動幅が大きいことから加齢に伴う体温調節機能の低下がうかがえた。

### 【まとめ】

個人差はあるものの本調査における活動量測定結果では高齢者の多くは若齢者と同等以上の活動をし、運動強度も強い傾向があった。このような元気な高齢者においても、皮膚温変動や主観申告結果より生理機能・感覚機能の低下がうかがえ、夏期の高温多湿環境下における適切な環境調節行動の重要性が示唆された。

【参考文献】1) 五十嵐由利子他；高齢者の温熱環境に関す

る実態調査（第3報）高齢者の皮膚温の特性、日本家政学会誌、vol.46、No.6、587-596（1995）

### 【謝辞】

実測調査をサポートしてくださいました奈良女子大学名誉教授磯田憲生先生、並びに同准教授久保博子先生に深く感謝の意を表します。本研究における調査・実測に際し、快く引き受けてくださったシルバー人材センターの皆さまに心より御礼申し上げます。

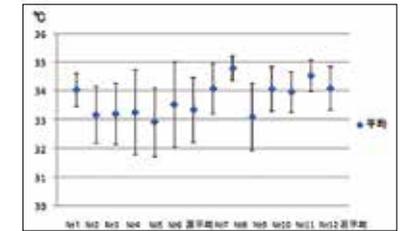
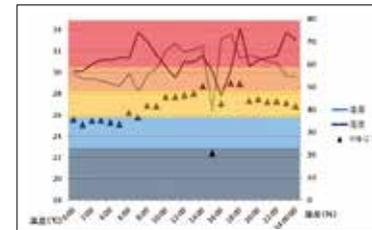


図3 胸部皮膚温平均値・偏差

### 【高齢者 No.4】



### 【若齢者 No.10】

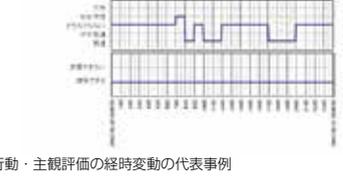
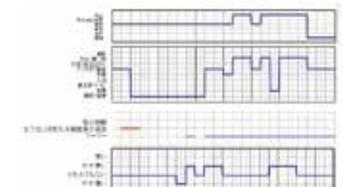
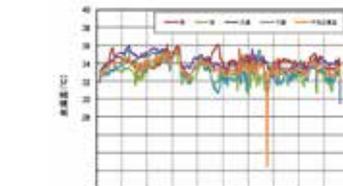
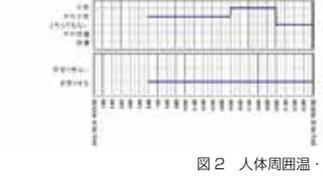
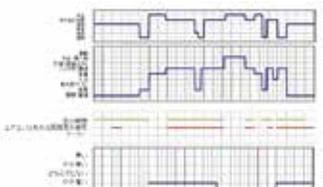
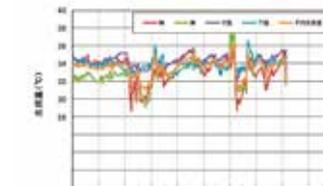
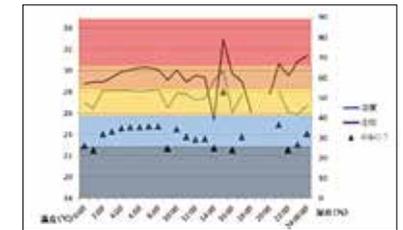


図2 人体周囲温・皮膚温・生活行動・主観評価の経時変動の代表事例



平井 瞭世  
Akito Hirai

## 奈良の伝統的な防寒具「おいね」着用が 温冷感に与える影響に関する研究

### 【はじめに】

東日本大震災以来、被災地だけでなく全国的に節電意識が高まり、節電・エコ活動が活発になっている。エアコンの設定温度の適正化や夏のクールビズ等は広く一般に受け入れられ、実施されるようになった。本研究では冬期の節電に着目し、ウォームビズに代表される「環境温度の調整だけに頼るのではなく着衣による調整」をテーマとした。これまで本大学においても研究されてきた奈良県の昔ながらの防寒具である「おいね」をとりあげ、着衣による温熱的快適性向上の可能性を検討することを目的とした。

### 【調査概要】

調査場所は本学3階製図室とした(図1) 選定理由は、他教室と比べて天井高さが高く、室温の垂直温度分布が予測されたためである。

### 1) 環境測定

測定項目: 温度(床上10cm、140cm、280cm) ×3カ所 計9カ所  
相対湿度(床上140cm)3カ所(図1)  
温湿度: 小型温湿度データロガー(T&D TR72Ui, ESPEC RT-12)による10分間隔の自動計測

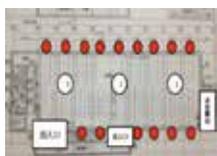


図1 製図室平面図

測定期間: 夏期: 7月3日~8月3日  
冬期: 12月1日~12月28日

### 2) 被験者実験

[対象者]: 奈良県内K大学2回生11名、3回生9名 計20名(男性10名・女性10名)  
[調査項目] 主観申告: 快適感・乾湿感・室温評価・温熱環境 各7段階、  
全身・部位別温冷感 9段階  
疲労感・気流感・部位別発汗度、5段階  
[実験のタイムスケジュール]: 「おいね有」と「おいね無」の順番を入れ替えたA・Bの2条件を設定した(表1)

実験日: 2012年12月10日、20日、21日  
おいね: フリース素材、縦52cm・横35cm(図2)

被験者の着衣条件: 平均1.05clo (偏差: ±0.24)

### 【環境測定結果】

夏期と冬期の1カ月間の温熱環境測定結果(表2)をみると、夏期には居住域の平均温度は27℃程度、冬期は19℃程度であった。冬期の平均湿度は、30%程度と乾燥していた。図3は、夏・冬の平均環境温度を横軸にとり、上(床上280cm)・



図2 現代風「おいね」と実験時の様子

表1 実験のタイムスケジュール

☆: 申告

条件	おいね有			休息			おいね無		
	0分後	30分後	90分後	0分後	10分	30分後	0分後	30分後	90分後
A	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆
B	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆

中(床上140cm)・下(床上10cm)の垂直温度分布を示した。グラフの傾きから、製図室の垂直温度分布が読み取れる。夏期は暖気が上部に溜まるため下部の居住域が涼しくなるが、冬期では逆に冷気が下部に溜まり足元の冷えを生じさせる。図は測定期間中の平均値で示しているが、暖房使用時には温度勾配が一層大きくなると考えられる。

### 【被験者実験結果】

図4に着用条件別の経過時間と温冷感評価の平均値と標準偏差を示す。着用後30分で温冷感は1ポイント上昇し、その後評価を維持していることがわかる。床上10cm(足元)と床上140cm(居住域)の環境温度と温冷感の関係を図5に示す。被験者の着席位置に最も近い測定ポイントの温度とその時の主観評価の関係をプロットしている。どちらも「おいね」着用時のほうが温冷感の評価が高いことがわかる。「おいね無」では-1~-2の涼しい側の評価が多いのに対し、「おいね有」では特に足元の温度が17~18℃と低い時においても0(どちらともいえない)の温熱的中性以上の評価であった。なお、実験時のエアコン設定温度は20℃とし、環境温度はなりゆきとしたため、環境温度は床上10cmが17~21℃、床上140cmが21~23℃となり、快適範囲とされる垂直温度分布3℃を超える箇所もあったが、おいねの着用が被験者の評価を上げたと考えられる。

図6は横軸に環境温度、縦軸に快適感を取り、多項式近似を示している。青線「おいね有」は20℃近くで快適感評価が最大となるが、着用の

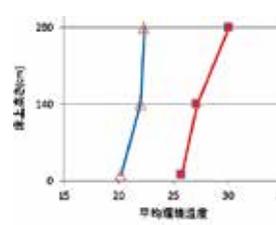


図3 測定対象室の垂直温度分布

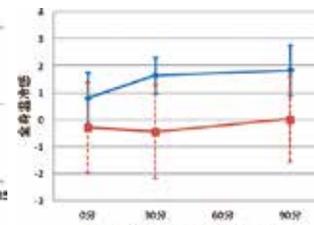


図4 測定対象室の垂直温度分布

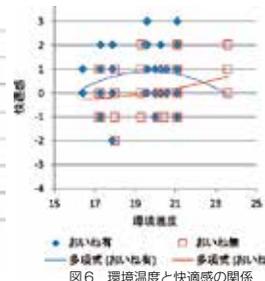


図6 環境温度と快適感の関係

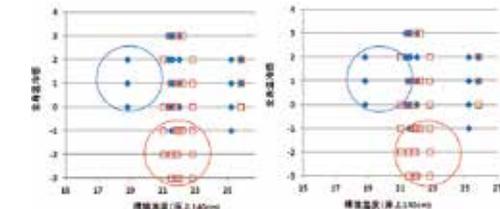


図5 環境温度と全身温冷感の関係

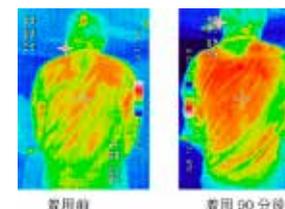


図7 サーモグラフ

表2 製図室の夏期・冬期の温熱環境

測定項目	夏期			冬期		
	平均	標準偏差	範囲	平均	標準偏差	範囲
室温	27.0	1.1	25.0~29.0	19.0	1.1	17.0~21.0
湿度	55.0	10.0	30~80	30.0	5.0	20~40
室温(10cm)	21.0	2.0	17.0~25.0	17.0	2.0	15.0~21.0
室温(140cm)	21.0	2.0	17.0~25.0	21.0	2.0	17.0~25.0
室温(280cm)	21.0	2.0	17.0~25.0	21.0	2.0	17.0~25.0

ない場合(赤線)は23℃を超えてもピーク値が表れておらず、着用により低い環境条件においても快適性が得られることがわかった。図7は、左が「おいね無」90分後、右が「おいね有」90分後サーモグラフ画像である。背中以外の部位でも皮膚温の上昇がみられた。

### 【まとめ】

製図室において「おいね」を着用した被験者実験を行い、温冷感・快適感に与える影響を検討した。その結果、着用後短時間で温冷感評価が1ポイント程度上昇することがわかった。着用による作業性の低下や疲労感の申告はなく、現代風にデザインされた「おいね」は温冷感の個人差の調整に有用であるとともに冬の適切な環境温度設定に寄与すると考えられ、昔ながらの防寒具の効果を検証することができた。

### 謝辞

本研究を実施するにあたり、おいねを提供してくださった村田先生・村田ゼミ生、そして実験に協力してくださった教員・学生の皆様に御礼申し上げます。



松井 貴史  
Takashi Matsui

## 町家に住むということ ～温湿度環境調査と町家の住み心地との繋がり～

### はじめに

近年、伝統的な建物「町家」は修理されることなく取り壊され、その跡地が駐車場になりプレハブ住宅に建て替えられる傾向がある。その結果、かつての町家で構成される町並みが失われつつある。しかし、そこには駐車場や個室が確保しづらい、あるいは冬季に寒い、暗いなど道に接して建てられる町家の空間構成上の問題もある。町家の修繕大工もおらず、維持が簡単ではないという現状があると共に、時代の変化の影響も受けている事実がある。そこで、町家が多く残るならまちの町屋の調査を行い、現状を把握し町家とはどのようなものかを私のような世代の人達に伝えると共に、後世に残しながらその時代にあったライフスタイルを送れないかということを考えていくことを目的とした。

### 調査方法

ならまちの伝統的町家3軒とプレハブ住宅1軒を対象とし、下記の3つの調査を行った。

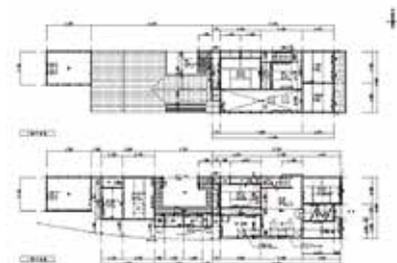
- 実測調査（町家のみ）
- 環境測定
- 住み手へのヒアリング（町家のみ）

表1 調査対象住宅



### 調査対象住宅の作成図面の一例

#### ①町屋 平面図



#### ■3軒のヒアリングの総合

町屋では夏季の冷房の利用は限定的であった。これは、冷房を付けなくても夏季の過ごしやすさが確保されていたためと考えられる。中庭への打ち水や、土間を通り抜ける風など、町屋特有の良さを感じながら生活していた。一方、冬季の寒さについては不具合が多いと感じられた。冬季には部屋単位に暖房していたが、その部屋以外は寒い状態となるため、衣服の重ね着、防寒の工夫がなされていた。町屋に住んでいる人は現代のライフスタイルに合わせて家屋の改装を行いながら、基本的には住まい方や着衣を工夫して季節に応じた生活を行っていた。

### 環境測定

#### ●設置時期

夏季 2012.9.20 - 11.4

秋季 2012.11.5 - 12.8

冬季 2012.12.11 - 2013.1.18

測定項目：温度、相対湿度

測定方法：サーモレコーダーによる

10分間隔の自動計測（図1）



図1 設置風景

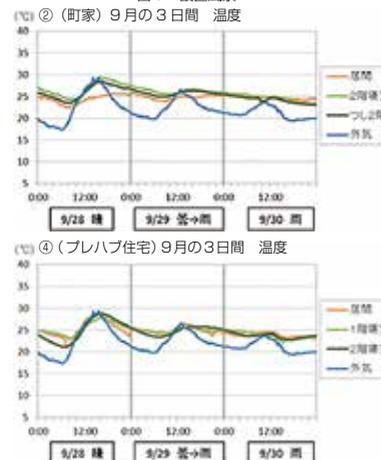


図2 夏季の町家とプレハブ住宅の温度比較

測定期間中の代表日3日間の夏季温度経時変化を図2に、冬季温度経時変化を図3に示す。プレハブ住宅のグラフを見ると、どの部屋も外気に近い温度になっているが、町家の1階の温度は外気・2階と比べると約4℃低いことがわかる。夏季において町家の1階は過ごしやすい環境にあるといえる。

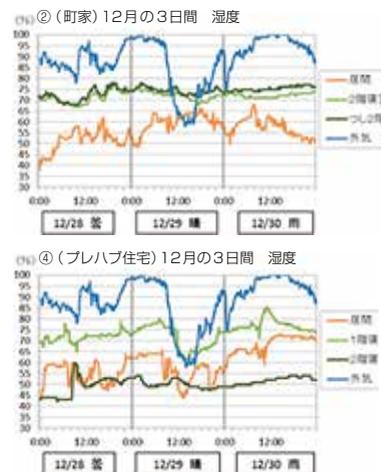


図3 冬季の町家とプレハブ住宅の湿度比較

町家は夏季における外気の湿度の変動が大きい時間帯も、どの部屋においても湿度の変動が小さかった。冬季においても居間は暖房器使用の影響で変動が大きいが、それ以外の部屋は変動が小さく安定した値を推移していた。これは町家の優れた調湿機能を示していると考えられた（図3）。

### 町家である意味

町家の建て方は密集した市街地に一定の秩序を与え、限られた日光や新鮮な空気、プライバシーを守る意味がある。よって、その秩序が壊れてしまわないよう、町並みを保存する意義は大きいと考える（図4）。



図4 町家の並びとプレハブ住宅からの視線

### 現代のニーズをどう取り入れるか

#### ・寒さの対策

必ずしも量である必要はない。板張りにし床暖房を入れて、壁材も土壁に限定せず現代の技術により断熱性を高める工夫をする。

#### ・プライベートな空間（個室）を設ける

プライベートな個室としては離れ、または2階を使用するのが一番良い方法だと考える。中庭もプライベートな空間として使える。

#### ・車庫を設ける

前面道路に面してみせの間、又は中の間までを車庫としてその後ろに一間を設ける。そして中庭、続いて母屋という形態をとるのもひとつの手段と考える。

#### 町家で残すべき部分

通り庭（土間）・中庭と切妻・平入りの屋根・格子など町家のファサードに関してはなくしてはいけないと考える。部屋の構成や通り庭・中庭の在り方については現代のライフスタイルに合わせることはできるだろう。

謝辞：本研究を進めるにあたり、実測調査、環境測定にご協力頂いた居住者の皆様、資料を提供頂いた奈良の町屋を考える会・サポーターの皆様にご御礼申し上げます。



妙本 咲季  
Saki Myomoto

藤井ゼミ

## 震災応急仮設住宅における住民コミュニティ形成のための建築的提案 ～石巻でのボランティア経験を生かして～

2011年3月11日、東日本大震災において宮城県石巻市では震度6弱を観測し、直後の津波で平野部の約3割、沿岸地域の約73km<sup>2</sup>が浸水した。2012年1月現在死者3471名、行方不明者470名と、被害は宮城県最大規模である。

本研究では、約5ヵ月間のボランティア活動の中で聞いたこと、見たこと、感じたことを元に、より住みやすく、またそこに住む人々の出会いを増やす仮設団地やその集会所の計画を提案する。

集会所…50戸以上の仮設団地に設置。概ね110m<sup>2</sup>  
談話室…50戸未満の仮設団地に設置。概ね50m<sup>2</sup>

### 1. 集会所の規模

団地規模や集会所の大小に関わらず、集会所の利用人数にはあまり差が見られない。原因は、特定グループの陣取りや子供の出入りの禁止など、使用者の排他性だと考えられる。

そこで、1つの大きな集会所ではなく、規模を縮小し代わりに数を増やしたミニ談話室を複数分散配置することで利用者の増加を狙う。



図1 集会所・談話室平面図

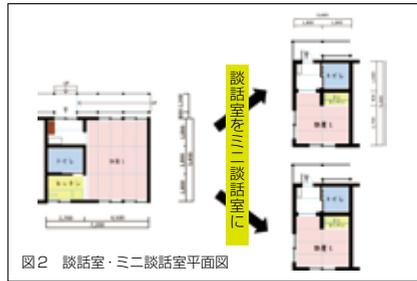


図2 談話室・ミニ談話室平面図

### 2. 集会所の立地

現在、集会所の立地は、団地内の面積的中心や団地内の出入り口から離れた場所などが多く、その前の人通りがあまり考慮されていない場合が多い。その為、道を歩きながら中の様子を見かけその楽しい雰囲気誘われる、といった偶然が期待できない。

そこでその立地を、より人通りの多い団地入り口や主たる通路沿いに移動する。

### 3. 集会所外でのコミュニケーションの場

住戸の玄関前や住棟間の隙間など、集会所以外の各所に、自然に住人同士の接点が生まれる場を多く設ける。人々の動線を意識したベンチの配置や、雨風をしのげる屋外スペースなどを設置し、偶発的な人々の出会いの場をつくってゆく。

### 4. 子供の遊び場

多くの仮設団地は、元々公園や広場、学校のグラウンドだった場所に建てられている為、子供たちの遊び場が減っている。

そこで、駐車場を1ヵ所に集約し、子供の遊び場を確保する。また、住棟配置に変化を加え隙間を多く設けることで、子供たちが建物の隙間を利用して走り回れるスペースを確保する。

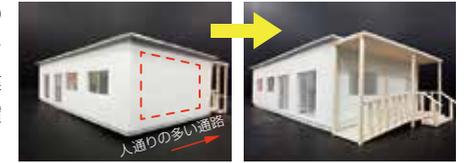


図3 人通りの多い通路面に窓と玄関を配置

### 5. 集会所の玄関と窓

多くの談話室は、人通りの多い通路面に窓が少なく、玄関も通りから奥へ引き込まれた位置にあることが多い。これは、通りから直行方向にスロープを引き込み、その先に玄関があることが理由なのだが、中の様子が外から窺いにくい為、慣れない人は、中へ入りにくい。

外から中の様子が見られ、安心して入れるよう、集会所の居室には通りに向かって大きな窓を開け、また玄関はその扉が直接道路に向かうように配置する。具体的には、玄関へのスロープを通りに平行にすることで解決する。(図3)また、窓は極力大きくし、窓下高さは低くしたい。これは、外を歩く人から室内で座っている人が見える為の工夫である(図4)。



図4 談話室に設けられた大きい窓



仮設住宅に住む人達の笑顔

### さいごに

ボランティア活動を通じて被災者の暮らしにふれ、彼らの生活に少しでも役にたてられればとの思いから本研究を行った。被災者の置かれている環境の一端を伝え、また本研究の提案が今後また起こり得る災害時の仮設住宅計画に際しての一助となればよいと願う。

### 謝辞

本研究を進めるにあたりご協力して頂いた、石巻市で活動を続けておられるピースボート災害ボランティアセンターの皆様、ならびに東北で出会った皆様に深く感謝致します。



南 貴寛  
Takahiro Minami

## 高齢者の居場所、役割創出としての活動 ～NICE! 藤井寺親父パーティの取り組みから～

齋藤ゼミ

### IV 考察

表1にボランティア参加者の属性を示す。親父パーティーとは言っても女性が13人中10人であり、年齢では前期高齢者が12人、職業の有無では無職の方が10人と多数である。親父パーティーにはリーダーをはじめとする役職はなく、月1回開催される会議の場で全ての事柄が決定される。このことが図2に示した活動への参加のしやすさに表れていると推察され、さらに図3の「参加して良かったこと」[※2]では「地域社会に貢献できた」や「自分の役割、経験を生かせる」が他の活動と比較して非常に高く、また、テーマである認知症への理解が進んでいることが認められる。アンケートへの記述回答からは、活動を支える社会福祉協議会（藤井寺市では地域包括支援センターは社協の下部組織である）との関係が非常に良好であることが伺える。

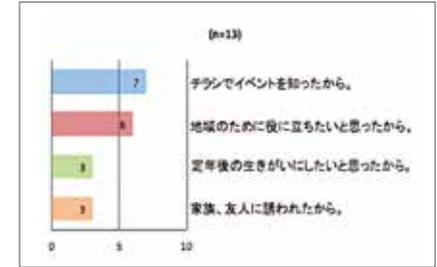


図1：親父パーティーへの参加のきっかけ

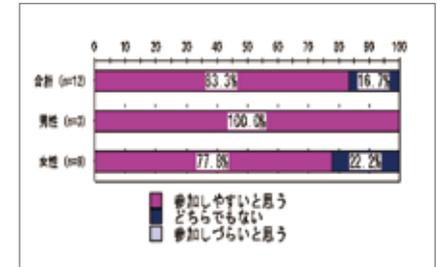


図2：活動への参加のしやすさ

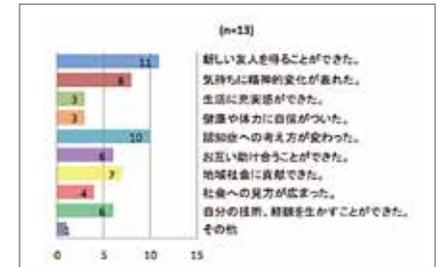


図3：親父パーティーに参加して良かったこと

### 「親父パーティーの活動が発展してきた要因」の質問への記述回答

- ・おしつけや無理がなかったから
- ・社会福祉協議会の支援、協力が大きい
- ・社会福祉協議会のもと、自由な発想で行事の内容に取り組んだ
- ・無理なく自分の出来る事をしてきた
- ・都合の良い時だけ参加できるから
- ・常に話し合うところ
- ・反省し、より良い方向に思う姿勢
- ・楽しくなければ、人を楽しく出来ない
- ・役員制度がなく、自由に参加できるから
- ・参加のしやすさ、指導者の真摯な姿勢

### V まとめ

行政と住民の関係は、とすれば行政主導になりがちであるが、親父パーティーでは「藤井寺を住みよいまちにしたい」という共通のテーマのもとに住民の自由な発想を、行政が予算や場所の提供といういわば「縁の下力持ち」として共に活動するというスタイルが活動の継続と発展に関わることが理解できる。参加されている住民の地域への愛着度や自己肯定感そして活動への誇りは他と比較して極めて高く、主体的な活動への関わりがその原動力であるものと推察される。

【※1】  
名前の由来、【N】認知症になっても【I】いきいき暮らせる【C】Cityって【E】ええやん。をもっと市民に伝えていきたいという思いを込めたものである。

【※2】  
内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(2003)を参考に設問を作成(認知症の項目のみ新設)。本意識調査は、何らかの社会活動に参加している高齢者を対象とし、図3の項目は調査で回答の多かった順である。

### I はじめに

地域コミュニティにおいて元気な高齢者、特に定年後の男性の力を発揮する場の確保は重要な課題である。そのような中、NICE! 藤井寺親父パーティー[※1] (以下、親父パーティー)の存在を知った。本研究は、親父パーティーの活動の経緯や現状を把握し、他の地域にも資することを目的とする。

### II NICE! 藤井寺親父パーティーとは

2007年12月藤井寺市地域包括支援センター主催の『親父パワーを地域のチカラに!』の講演会が開催され、講演会参加者を中心に、認知症をキーワードにした地域づくりのボランティアとして2008年に結成された。「自分達が楽しむこと」「認知症になっても安心して暮らしたい」という思いから写真で紹介するようなイベント等を開催している。2009年3月『認知症になってもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2008』のモデル事業として受賞した。

### III 研究方法

2012年7月藤井寺市地域包括支援センターを訪問、ヒアリングをさせていただいて以降、毎月開催される「企画会議」やその間のイベントに参加するとともに活動を担うボランティアの方にアンケート調査を実施した(16人に配布、回収は13人)。



公園を親父が変えるイベント

「公園で子どもたちが遊んでいないな」という意見から生まれ、音楽会や遊びなどを実施。



藤井寺市ってええやん! 計画

ゴミを拾いながら認知症啓発のチラシを配りながら徐々に音楽会を開く。

表1：調査対象者の属性

データ数	男性	女性	合計
年齢構成			
64歳以下	2人	4人	6人
65～74歳	1人	5人	6人
75歳以上	0人	1人	1人
現住所			
藤井寺市在住	3人	9人	12人
藤井寺市以外	0人	1人	1人
居住年数			
20年未満	2人	0人	2人
20～30年未満	3人	0人	3人
30～40年未満	3人	1人	4人
40年以上	4人	0人	4人
職業			
無職	1人	9人	10人
正職員・正社員	1人	0人	1人
パート・アルバイト	1人	1人	2人
家族構成			
独居	1人	4人	5人
夫婦のみ	1人	4人	5人
核家族	0人	2人	2人
3世代	1人	0人	1人
活動歴			
1年未満	0人	1人	1人
1～5年未満	1人	5人	6人
5年以上	2人	4人	6人

※数字は、実数を示す。



### 各卒業研究ゼミのテーマ

- 東ゼミ 生活環境学・住居学・人間工学
- 加藤ゼミ インテリアデザイン、住宅設計、  
家具デザイン、店舗デザイン、  
環境デザイン
- 金敷ゼミ 認知心理学
- 齋藤ゼミ 福祉のまちづくり・住居学
- 中山ゼミ ユニバーサルデザイン  
インテリアデザイン  
プロダクトデザイン
- 藤井ゼミ 住宅・建築・都市等の建築関連分野
- 三井田ゼミ 建築・まちづくり計画
- 村田ゼミ 生活科学
- 李ゼミ 色彩学、  
インテリア・エクステリアにおける  
色彩計画





畿央大学 健康科学部 人間環境デザイン学科  
第7回 卒業研究講評会

全体発表会 2013年2月12日 10:00~16:00  
選抜発表会 2013年2月13日 13:00~17:00

会場: L101教室

選抜発表者:

浦本諄也 佐藤 唯 澤井宏実 助川 渚 福本悠美 竹本笑子  
田中康介 玉山真梨子 中井千織 仲川拓馬 野神千鈴 妙本咲季  
村井智絵 守行一晃 山本早輝 以上 15名12グループ





平成24年度  
**卒業研究**

**学長賞**

中井 千織

**優秀賞**

竹本 笑子

仲川 拓馬

野神 千鈴

村井 智絵

守行 一晃

山本 早輝

以上 7名5グループ





2012年度畿央大学 健康科学部  
人間環境デザイン学科卒業研究・作品展

## 大卒業展

畿央大学開学10周年事業  
「愛と絆～魅力ある未来へ～」

会場：奈良県文化会館

会期：2013年3月2日(土)

10:00～18:00

3月3日(日)

10:00～16:00





# 大卒業展シンポジウム

～卒業作品にこめた想いを語る～

会場：奈良県文化会館

会期：2013年3月2日(土) 14:30～16:30

- |                |       |       |       |       |
|----------------|-------|-------|-------|-------|
| パネラー：1期生 下川 愛美 | 白井 達也 | 俊田 浩幸 | 西山 直樹 | 南口 晃平 |
| 2期生 庄司孝太郎      | 西嶋健太郎 | 美馬 利雄 | 森本 実希 | 山形 綾香 |
| 4期生 廣岡 学       | 深井 美帆 | 外園 真士 |       |       |
| 5期生 清水 祐希      | 鈴木 勇輝 |       |       |       |
| 6期生 小川 洋平      | 澤田 浩孝 |       |       |       |

以上 17名



ありがとう。

みんな、よく頑張った。

次の言葉を、君たちに送りたい。

「stay hungry, stay foolish.」 貪欲であれ、愚直であれ。

(アップルの創始者、スティーブ ジョブズのスタンフォード大学卒業式における講演より)

社会に出ても、卒業研究に取り組んだ時の気持ち、頑張れる自信を忘れずにいてください。何事にも真摯な気持ちで取り組み、チャレンジしてください。

人間環境デザイン学科 学科長  
三井田 康記

卒業研究発表が終わりました。本年は、両極化の傾向が見られましたが、力作が揃い、私個人は優秀賞の選定に悩みました。大卒業展の開催と重なり、プレッシャーも大きかったのではないかと推察します。

私は、論文指導をおとしてゼミ生と関わりました。調査依頼の交渉、依頼文の作成、ヒアリング調査等の実施、データの処理や分析、もちろん文章力も問われます。計画的かつ地道な取り組みが要求されます。また、多くの社会人の方の協力を得るための努力も積み重ねていったことと思います。ゼミ生も含め、残念ながら今年は論文からは優秀賞が選ばれませんでした。しかし、もう少し手を加えれば完成度が増すものも多かったと思います。多分、研究発表会が終わった頃に初めて自分のものになったという人も多いのではないかと思います。こうした経験は、今後に必ず生かされます。どうか自信を持って下さい。

社会人になった皆さんにお会いできることを楽しみにしています。人間環境デザイン学科 学科主任  
齋藤 功子

よく遊べましたか？

酒を飲むのも友人との雑談も遊園地もゲームも楽しいでしょうが、多分、一年も経つと何も記憶には残っていません。心に残る遊びは、苦労と道連れだと思えます。もがき苦しみ、己の無能さに呆れ、逃げ出したいくなる気持ちを抑えながら必死で戦った者のみが、忘れ得ぬ満足を獲得できるのです。

明日からは当面下積みの生活、険しい毎日が待っているでしょう。まずは頑張るしかありません。努力は未来への投資なのです。そうしていつか、知恵や技術を身につけた晩に、もう一度卒業研究での自由な創造力を思いだして下さい。もし君が、あの日の夢を持ち続けていられたなら、その時こそ夢が実現するかも知れません。

諸君の健闘と幸せを祈ります。また一杯呑もか・・・？

藤井 豊史

この一年間、卒業制作、卒業論文に取り組み、こうして発表を終えた今、皆さんはどのような思いを抱いていますか？発表会場で一人一人から説明を受けるなかで感じたのは自信や達成感ばかりではなく、悔しさや不安、その他込み上げる様々な思いでした。結果に満足出来た人もそうでない人も、この経験を通して自分自身が何かしら変化し、多くのことを学んだはず。そして私たち教員も皆さんへの指導を通してかけがえのない経験ができました。さあ、いよいよ社会人ですね。畿央大学の卒業生として、しなやかに強く、未永く活躍されますことをお祈りしています。

東 実千代

私が初めて担任をした忘れることのできない学生たち。それだけに思い入れがつつい強くなってしまふのは仕方ありません。4年間はあっという間に過ぎ、とうとう卒業研究さえも終わってしまいました。2013年は畿央大学開学10年目となるため、卒業展が記念すべき大卒業展になり相当なプレッシャーもあったかと思いますが、みんな良くやってくれました。作品の充実度は開学以来最高潮に達したと言えるのではないのでしょうか。個別的には本当に頑張った人、空回りしてしまった人、自分の考えを伝える事ができた人、そうでなかった人、不満足なものしかできず悔しい思いをした人、と様々な想いが錯綜しているかと思えます。しかし完璧な作品などありません。私自身、作品ができた時、ああすれば良かった、こうしたらもっと上手くいったのに・・・と後悔ばかりで嫌になります。次は絶対に最高のものをつくろうという気持ちこそがモチベーションになるのです。社会に出ても他人の意見を謙虚に聞き、最後はあくまでも自分で考えて結論を出し、前へ進んで行ってほしいと切に願っています。

加藤 信喜

畿央大学および人間環境デザイン学科の10周年をお祝い申し上げます。本年度の卒業制作の作品・論文を注意深く観察した結果、開学以来のシステムがここに1つの閉じられた円環として完成したことをあらためて実感しました。わたくしはシステムに関心があり、局所視野で人間環境デザイン学科という事例の作動を見つめてきました。その結果、autopoiesisシステムの妥当性がわたくしにとって明らかになった10年間でした。個人的な絶望と展望とが複雑に入り混じっていますが、このシステムのほんのわずかな作動部品として関与できたことについては非常に嬉しく思います。

いま現在、人間環境デザイン学科の究極の上位目標はシステムとしてのHOMEを創り続けることであり、Universal Designはその手段であると、わたくしは信じています。自ら自身を創り出す(creata et creans創造されかつ創造する)、まさにautopoiesis(自己創作)の中で、学科の卒業生および在学生のみなさんは、HOUSEではなくHOMEを創り続ける能力に長けているのだと信じています。

HOMEは不可視であり観測対象にはなりえません。なぜなら、観測対象への意識それ自身がHOMEシステムの産物だからです。だから、「HOMEを創れ！」と言われても、何をどう試行錯誤しても、HOMEは創れません。あなたが「何をどのように行おうか、帰結としての産物が何であろうか、自ずからHOMEに従っている」からです。この点において、才能・学力・社会的地位、容姿、人間性でさえもまったく関係ありません。無理に自信を持つ必要もないし、劣等感を持つ必要もないのです。

人間環境デザイン学科のわたしたちは、それしか武器はないので論理的にアピールできないのですが、それだけの武器があれば十分です。

これまでも、そしてこれからも。

金敷 大之

今回の卒業制作は、例年と違って「大卒業展」という大きな？ゴールが設定されたので、結構プレッシャーになったのではないかと思います。なかなかどうして、そのプレッシャーを跳ね返して頑張ってくれた作品が多くありました。中間発表の時は、大丈夫かな？とちょっと心配になりましたが、なんとか大卒業展に出して恥じない作品が揃ったと思います。でも、結果をうまく出せなかった作品もありました。あまり時間をかけないで努力しないまま遅れてしまった人もいます。アイデアを固められなくて遅れた人もいます。でも、色々考えて悩みに悩んだ人は、後から思えば、すごくいい経験になると思います。デザインの最適解を求めることは、時間がかかるものです。なかなか思い付きでできるものではないのです。時間をかけてじっくりと最適な答えを探し求めて作り込んだ人の作品が大卒業展に相応しいものになったということです。

中山 順

今年は、開学10周年そして「大卒業展」という年にあたり、みなさんにかかる期待も大きく重圧を感じた人もいたことでしょう。

しかし大学生活の集大成としての力作が揃ったと感じています。

この1年間、あなたがたは苦戦し、悩み、落胆しました。

私は「もう少し頑張ってみよう」と言いました。

「どうしたらいいかわかりません」と言ってきました。

私は「まだ時間があるからゆっくり考えてみよう」と返しました。

しばらくすると困難を克服し笑顔を見せてくれました。

何度これを繰り返したことでしょう。

すばらしい努力の証だと思っています。

努力は色々なものを引き寄せるとしています。

幸運も縁も人との出会いも引き寄せます。

努力を惜しまない人生を送ってください。

迷ったときには来てください。

私が言いましょう。

「大丈夫！まだ頑張れるから」と。

村田 浩子

畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科7期生のみなさん大変お疲れ様でした。畿央大学で4年間学んだことの集大成としてひとつに仕上げるまでいろいろと苦労があったかと思います。ひとり、またはチームとなって就職活動と同時に卒業研究のテーマを決め、調査、打ち合わせなどの準備からひとつの「かたち」にするまで、試行錯誤を繰り返しながらやり遂げた結果に対する達成感、満足感は今やしっかりと身につけているはず。苦労したことも楽しかったこともすべて忘れられない素敵な思い出となり、今後この貴重な経験を社会人の仕事でしっかりと生かしてほしいと切に願っています。今後のご活躍を期待しています。また、いつも陰ながら応援しています。

李 沅貞

4年間、ホントあっという間だったと思いますが一生懸命楽しめましたか。この学年のみなさんは1回生の頃から、まったくもって心配のいない学年でした。今までは全体的にヤンチャな（ごめん！）学年でその子たちが大きな成長を遂げて卒業…なのですが、入学当初からどの先生からも手を焼かない学生たちだってお話していたのを覚えています。だけどきと、それぞれにはいろんな悩みもあって大きな壁を何度となく乗り越えてきたことだと思います。それを実は卒業研究の講評会で気づきました。小さな不安を強気で必死で隠しながら臨んだ講評会に感動をしました。自分はあまり出来ないから…といつか話してくれたその学生は、最後にはやり遂げたことが嬉しくて、そして支えてくれた周りの人に感謝で涙していました。やったね！って心の中で本当に思いました。その学生だけじゃなくみなさんにも心から言いたいと思います。4年間本当にお疲れ様でした!! いろんな課題やカリキュラムよくがんばりました! あといろいろサポートもしてくれてありがとう。助かったこと、いっぱいありました。みんななら大丈夫です。自信を持って…。また会える日を心から楽しみにしています。

奥村 亜希

ゼミを持っていない私は4回生を直接指導する機会ほとんどなく、無責任に学生の作品に批評する一番気楽な立場です。特に二年前までは学生を弟や妹のように見ており、自分とあまり変わらない立場の、ある種ライバルのような感覚で作品を見ていました。

しかし、自分に子どもができてから、もしこの学生が自分の子どもだったら? というような目で見るようになってしまいました。ある時には学生を娘の名前で呼びそうになったこともあり、自分の頭の中で「私が世話をしなくてはならないカテゴリー」の中に学生と娘が一緒くたになっていることに気づかされました。

そんな自分自身の変化のせいか、今年度は作品にこめられた感情に引き込まれたり、逆に力を出し切れなかった学生には説教じみたことを言ったり、「学生にとってのお姉さん」よりは「おばさん」になってしまった気がします。

そんな大きな変化を見守ってくれた皆さんは私にとって特別な一人ひとりです。巣立っていてもこの4年間を糧に頑張ってください。

長井 典子

本学創立10周年を迎える節目の年に、創立以来、人間環境デザイン学科の教育・研究にかかわってきた者の一人とし、「第7回卒業制作・論文作品集」に講評を寄せる機会を得たことに感慨深いものがある。

本年度も、本学科の性格上、その内容が多彩で広範囲にわたるもので、専門分野を超えて極めて興味深い作品がいくつもあったが、ここでは、私の専門分野である建築の作品について感想の一端を述べる。

建築が生活の歴史や文化の集積であり、人々によって共有されているものであることを再認識させる提案が多かった。真摯に考え抜き、豊富なりサーチを行い、練り上げたデザインを、プロ顔負けの模型から素朴で丁寧な表現まで、各人がそれなりに器用に、自分にあった表現法を選択して制作されていた。ただ、真剣に構造で勝負している提案が少なく、構造や力の流れに対して、もう少しデザインできるようになって欲しい。

岡井 豊治

## 人間環境デザイン学科 教員

### 教授

学 科 長 三井田康記  
主 任 齋藤 功子  
藤井 豊史

### 准教授

東 実千代  
加藤 信喜  
金敷 大之  
中山 順  
村田 浩子

### 講師

李 沅貞

### 助手

奥村 亜希  
長井 典子

### 特任講師

岡井 豊治

### 作品集 編集委員

長井 典子  
奥村 亜希

上田 彩乃  
牛之濱雄哉  
北林 将馬  
國松 大志  
酒井 翔悟  
坂本 在人  
佐々木康恵  
高橋 大亮  
田中 智江  
谷 玲佳  
出口 鈴佳  
羽瀨 将幸  
樋口 早紀  
神垣友里奈  
菅野のぞみ  
永島 舞  
西田 美里  
上田 加奈

## 卒業制作・論文作品集 7

2013年3月19日発行

発行 畿央大学

健康科学部 人間環境デザイン学科

代表 学長 冬木 智子

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

印刷 株式会社 明新社